

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ: ニュース・レターNo.40(2016年10月号)

9月1日から開催しました20世紀メディア研究会百回記念の企画展「雑誌に見る占領期—福島鑄郎コレクションをひらく」は無事21日に閉幕しましたが、皆さまにはお楽しみ頂けましたでしょうか。幸い来場者数も上々で、9月18日の国際シンポジウムもおかげさまで130名を超える盛会でした。お運び頂いた皆さまに感謝申し上げます。また、残念ながら来られなかった方々には、会員用のウェブサイトにアップされたレジュメや写真、そして『Intelligence』本誌へ掲載される原稿をお楽しみ頂ければと思います。

また、初心に返って今後も研究会を地道に継続していこうと思っておりますので、どうぞご支援、ご協力の程、よろしく願い申し上げます。さて、次号『Intelligence』第17号の投稿原稿を募集しております。締め切りは、9月末です。投稿をご予定の方は、事務局まであらかじめご連絡頂ければ幸いです。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイは、すでに第十回を重ねております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【20世紀メディア研究所百回記念国際シンポジウム】(9月18日(日) 午後13:00~18:00)

①山本武利(早稲田大学名誉教授)「20世紀メディア研究所と占領期研究」は、プランゲ文庫データベースの維持運営、有料公開に至ったこれまでの経緯を説明、閉鎖的な学界の慣例から脱却し、研究成果を公開して利用者に還元していきたいということが強調された。

②基調講演のルイズ・ヤング(ウイスコンシン大学)「新世紀における占領期再考」は、アメリカ研究者による日本の占領期研究が、第二次大戦戦中派であるライシャワーなどから始まり、1960年代、70年代、80年代から90年代にかけての各時代の研究の特徴を明らかにした上で、プランゲ文庫の位置づけも大きく変容してきたことに着目した報告であった。今後の研究展望として、戦争の前後を貫く「貫戦期」研究、アジアを射程にした植民地、占領地の歴史研究の必要が強調された。

③宗像和重(早稲田大学)「福島コレクションの由来」は、「早稲田大学図書館所蔵福島鑄郎氏旧蔵資料」として大学図書館に受け入れを担当したときのこと、直接、搬出・搬入の作業に携わった経緯から、その来歴を話された。

④石川巧(立教大学)「カストリ雑誌研究の現在」は、戦後占領期の用紙事情や狭義・広義のカストリ雑誌といった現時点の研究動向を踏まえて、「カストリ雑誌総覧」の作成を提言。将来にむけての研究インフラの整備こそ、資料的制約の多いカストリ雑誌研究の発展に寄与すると強調した。

⑤三谷薫(出版美術研究家)「占領期の少年少女雑誌:絵物語を中心に」は、戦前戦中からの絵物語から説き起こし、戦後占領期に全盛期を迎えたことを提示した。が、1955年以降、絵物語は、急速に雑誌における誌面スペースを漫画に奪われていくことになり衰退したという。

⑥土屋礼子(早稲田大学)「占領期の時局雑誌」は、時局雑誌と称された時事的トピックを扱った雑誌が、何を伝え論じたのかという点から、第一次大戦以降、昭和戦前期の時局雑誌、そして占領期に復刊・創刊された時局雑誌、暴露的時局雑誌を紹介しながら、その雑誌の内実を問い、1950年代の「週刊誌」創刊ブームに覆い隠されたものは何であったのかを考察した。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【コラム: 幻の戦前宣伝雑誌『グラフィック』(1936-41)を探して】

雑誌『グラフィック』は、1936年、IPR(太平洋問題調査会)ヨセミテ会議終了・帰国後に、尾崎秀実と共に会議に出席した西園寺公一の創刊したアジア情報誌(戦後の『世界画報』の前身)であり、版元の

創美社は、西園寺が社長、名取洋之助、濱谷浩らを写真で登用、尾崎もたびたび寄稿するゾルゲ事件にとっても重要なグラフ雑誌である。

「『アサヒグラフ』を進歩的にしたようなもんです」というマルクス主義経済学者による回想(杉本俊朗)もあるが、雑誌全体では、B4版の大型グラフ雑誌、写真が半分、記事が半分といった贅沢な作りで、写真は映画・演劇(例えば、モスクワ芸術座)・欧米風俗・ファッション・スポーツ、世界の観光地、中国特に上海の季節の町並み・風景など、モダンな海外文化が中心で軍事的色彩は薄く、上流欧風文化紹介誌の趣を持っている。幻の宣伝雑誌として、加藤哲郎・早稲田大学教授らが、ゾルゲ事件との関連から、鋭意、調査を進めているが、古書店で数号を入手したほかは、日本の図書館にも所蔵が見当たらないという。

政治的スタンスとしては、軍人の寄稿はなく軍国主義的ではないが、近衛内閣期の外務省外交路線を継承し、特に1939-1940年は「欧米対大東亜」の視点で中国汪兆銘政権を礼賛していることが特徴的である。西園寺公一が随時で署名執筆、40年には紀元2600年にあわせ社説も掲載。ドイツ報道もあるが、英米仏、スイス等に目配り、ナチス一辺倒でもない。ソ連報道も多いが、親ソ連ではない。コミンテルンが経費を出したアグネス・スモドレーの上海『ヴォイス・オブ・チャイナ』や、背後でソ連が動いたとされる米国『アメラシア』誌の創刊と同時期だが、コミンテルンやソ連の宣伝誌というものでもない。

内容に関する調査研究は、今後の進展を待つとして、版元の創美社とは、戦後、『世界画報』(世界画報社、1946年1月創刊、月刊、B5判)に引継がれ、のちの世界文化社へとつながったとみなすこともできそうだが、同名の雑誌も多々あり一筋縄にはいかない。占領期、『世界画報』は、民主主義とアメリカ文化の紹介をする一方で、戦争の真実を明らかにし、軍国主義を糾弾する写真報道への強いこだわりを見せていたともされる。

メディア史研究において、新聞社の戦前戦後のあり方を、その連続性からとらえる貫戦史の取り組みはこれまでもなされてきているが、同様に、出版社の戦前戦後のあり方を問う作業は、今後の研究の進展にかかっているといえそうだ。

[9月28日付 文責:吉田則昭]